

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	矢部貞治著『矢部貞治日記 銀杏の巻』
Sub Title	Teiji Yabe, "Teiji Yabe diary, Vol. 1"
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1975
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.48, No.1 (1975. 1) ,p.95- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19750115-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

矢部 貞治 著

『矢部貞治日記 銀杏の巻』

『矢部貞治日記 銀杏の巻』は、矢部貞治博士の日記三分冊の中の第一冊である。本書は、ヨーロッパ留学を終えて帰国した昭和二年五月二十八日から、敗戦の年である昭和二〇年一月三十一日までの日記である。

矢部博士については、政治学の研究者であれば周知のところであるが、巻末に附されている「矢部貞治略歴」を借り、その生涯をさらに簡潔に紹介しておく。明治三五年一月九日鳥取県に生まれる。大正一五年三月東京帝国大学法学部政治学科卒業、直ちに同大同学部助手になる（二三歳）。昭和三年五月東京帝国大学助教（二五歳）、昭和七年四月政治学講座担当（二九歳）、昭和一〇年四月文部省在外研究員として、米、英、独、仏に留学（三二歳）、昭和一二年五月帰国（三四歳）、昭和一四年八月東京帝国大学教授（三三歳）、昭和一五年六月海軍省嘱託（三七歳）、昭和一七年一〇月外務省嘱託

（三九歳）、昭和一八年六月海軍大学校教授嘱託（四〇歳）、昭和一九年一〇月大東亜省嘱託（四一歳）、昭和一九年一月綜合計画局参与（四二歳）、昭和二〇年七月内閣嘱託、昭和二〇年一月東京帝国大学教授依願免官（四三歳）、昭和二七年四月早稲田大学講師（四九歳）、昭和二八年一〇月選挙制度調査会委員（五〇歳）、昭和二八年一月政治学博士（五一歳）、昭和三〇年三月拓殖大学総長兼教授（五二歳）、昭和三二年七月憲法調査会副会長（五四歳）、昭和三九年六月拓殖大学総長兼教授辞任（六一歳）、昭和四一年四月早稲田大学客員教授（六三歳）、昭和四二年五月七日死去（六四歳）。

上下二段に印刷されている八七六頁という膨大な日記を、約十日間、これだけに取り組んで読み耽つてるとき、私の胸中に沸々と湧き起り、とめどなく広がっていくものがあつた。それは学問的な定義・術語としては多分市民権を有していないであろう「時勢」というものである。何人によつても抑えこむことができず、しかもすべての人をなびかせ従えてしまう、この得体のしれない「時勢」という怪物には、どうしようもないという嘆声を洩らしたことが度々であつた。

矢部博士が帰国したのは日中戦争の約四十日前である。小人数の会合で「戦争の危機と平和主義者の態度」という講話をするが、すでにわが国は、平和論、自由論を述べてみても実際の効果を期待しえないことがわかつていた、所詮これらの学説を守りつづけて、これを後に来るべきものに遺すのだ、という心がけの時代になつてい

た(昭和一二年七月三日)。平和を論じて四日後、日中戦争に突入する。「銃後の熱誠」は狂気の沙汰としかいえず、政府、新聞、ラジオはデマゴークに化し、朝日新聞社の軍用機献納運動にむらむらと反感が湧く(同年八月二〇日)が、それは個人の胸中における私憤として秘めておくだけである。尾崎行雄の反戦演説が非難されたことを新聞で読むと、矢部博士の首も一瞬冷たくなるのを感じる(同年八月三日)、帰国後三か月経過した時点である。

ヨーロッパ帰りの新進の東京帝国大学助教授をジャーナリズムも政府も放つておかない。時の勢いは自由主義者であろうと平和主義者であろうと、自己の体内に呑み込んで同化しようとする。この場合、時勢にさからえば首の刃がひらめくのである。首に刃を突きつけられていることを感じた瞬間、人の運命はきまる。刃の餌食になるか、刃に屈するか二つのうちいずれかである。本心からでなく護身のためにせよ、ひとたび権力を迎え入れたならば、権力はそれを受容した人間の心中の苦悩を一切考慮しない。権力は屈服した人間を利用するだけである。矢部博士が国際関係について述べた意見を、外務省情報部長はルーズヴェルト大統領の演説批判に歪曲して早速利用する。こういう形でこよう強く出てこようとは思わなかった(同年一〇月六日)と慨いてみても、後の祭である。目に見えないベルトは進み、外務省文化事業部、文部省、軍部のお膳立ての学者による北支視察団の一員に組みこまれることになる。矢部博士は必ずしも乗り気ではないが長尾総長、田中耕太郎学部長を通しての指名であり、上官はこの指名に応ずることを奨め、南原繁政治学科主任もた

ちまち諒承する。何人も、それがファシズム・侵略戦争に協力すると同じであるから拒否せよとはいわない。むしろ上官は、矢部博士に拒否されると大学及び学部の体面が保てなくなることをおそれてすらいる(同年一月二一―三日)。矢部博士は保身のため、かつまた組織の贖として北支へ行くという印象を読者は誰でも感ずるのである。北支では、日本の中国支配をいかに日記の中で厳しく批判し、また同行の仲間が懸命に視察していることをあげて、それが愚劣だとしてみても(六五頁)、じつは矢部博士自身も支配者のお先棒をかつぎ、愚劣者と同じ結果をもたらしていることは、現時点でこれを読む者には誰にでもわかる。昭和研究会、国政研究会のメンバーとして、主観的には侵略的・搾取的でない外交、戦争、統治の在り方を熱心に研究をすればするほど、結果は期待とは逆になつていくのである。その証拠としては、矢部博士がたどりついた結論のひとつを紹介するだけであろう。すなわち「蘭印を」占領したら軍政とすること、軍政の下に将来の高等弁務官たるべき文官を中心にして文官のスタッフを置き、一方東印度人の反和蘭分子などの中から対日協力の指導者を発見育成し、同時に憲法、政治、植民政策等の専門調査団を派遣し、之に調査と東印度憲法の立案をやらせること、その上で東印度人の意見も聴いて憲法を定め、一定の監視期間を以て東印度人の自治に委すべきこと、同時に東印度に対しては主権を認め、国民会議の自治的要素を拡大し(但し議会は諮問的とす)、民族文化を尊重し、共存主義の経済を行う原則を以て、軍事外交は日本の宗主権を認める旨の条約を結ぶべきこと(昭和一六年七月二九日)

というものである。

昭和一五年六月、海軍省囑託となつた矢部博士は、連日、海軍省に赴くか、海軍との研究会・会合に出席し、きわめて精力的に「東亜新秩序論」、「帝國国防国家論」、「臨戦政治指導方策」その他数多くの文書作成に没頭し、これらの仕事にたずさわつて、他に余力がない。帰朝直後、戦争の危機に際し平和主義者の立場から話をした面影は、昭和一六年一二月八日を前にして、その片鱗にうかがうことができない。大学のゼミナールも「東亜新秩序論」をテーマにし、きわめて時局向きであり、学生も矢部ゼミナールへ殺到してやまな。もとより矢部博士一人が、かつて軽蔑していた狂気の沙汰の渦中にあつたわけではない。開戦一週間前に、海軍省で海軍の軍人と矢部、松下正寿、大河内一男氏らの共同研究がおこなわれ、外交問題に関し「宣戦布告」という形式をとるべきか否かが論議された。「某中佐と大河内氏は、国民の志気を緊張させるために「宣戦布告」はぜひ必要だと主張する（昭和一六年一二月一日）。すでに矢は放たれていたものであり、あとは先陣を競うだけが問題である。

緒戦の勝利に随喜する矢部博士は庶民とならかわりがなかつた。ハワイ作戦は世界戦史上の一大偉業（昭和一六年一二月九日）であると書き、プリンス・オブ・ウェールズを撃沈したこと、豪快これに過ぐるはない、海軍万歳（同年同月一〇日）と筆を躍動させ、ハワイ作戦の天佑とマレー上陸作戦の天佑をしみじみ感じるのである（二一日）。昭和一六年を送るに当つて、博士が積極的に海軍の相談にあづかつているということから、歴史の進展中の一人の人物たる

を自覚して明年も大いに奮発したい（同年一二月三日）と抱負をさせたため。昭和一七年一月二一日の日記は、東大での政治学の講義で、世界及び大東亜の新秩序を論ずるが、その時の学生の反応と博士の所感は大東亜の問題を現実論ずると学生がげら／＼笑う。何の意味か判らぬ。いゝ加減な妄想だと考えて笑うとすれば、この激動して進展しつゝある世界の現実をすら、身を以て感じないものと言わねばならぬ。それが大学の醸す空気だとすると確かに大学は時代に遙かに遅れていると嘆ぜざるを得ぬ」というものである。大学は「時代に遅れたかもしれないが、時代と共に歩み進んだはずの矢部博士は、今日在世していたならばこの日記を悔恨の情なくして読み返すことができたであろうか。もとより時代・時局と共に進んだのは矢部博士だけではない。博士に接触し、共に会合し、研究会をもち、時代の推進者になつていった人びとは枚挙にいとまがないが、いまその一部をあげると、すでに本稿で名前のあがつている人びとのほかに、安井郁、中島健蔵、鈴木安蔵、田中二郎、板垣与一、永田清、大熊信行、務台理作、山田文雄、上原専禄、谷川徹三、中山伊知郎、末弘巖太郎、堀真琴、柳田謙十郎、高山岩男、西谷啓治、鈴木成高、高坂正顕、田中慎次郎氏らの名前が、きら星のごとく並んでいる。一つの時代が怒涛のごとく押し寄せてくると、多少の信念や思想を抱く人びとをも、おしみなく呑みこんでしまうのである。

人間は一本の弱き葦である。それは考える葦だとしても、やはり

嵐には耐えられぬ存在である。折れないまでも、なびかない葦はない。仮りに、なびかずに自立しようと強く意志する者には、嵐は集目的におそいかる。

矢部博士が、帰国後四カ月ほど過ぎた頃である。養田胸喜グループの新聞に、矢部博士は主権的民族国家を否定する者であるという非難の記事がのる(昭和二年一月九日)。これ以後、博士の原稿は尖鋭さを失っていく。「余り正面から批判することにすれば、僕の身体的生命が危いであろし、さればとて倫理と理想を説かなければ、僕の学問的生命がなくなるといふディレムマ」(一月十五日)におちいる。昭和一二年から一三年いつばいという期間は、リベラリストが、時局に便乗するか、それとも孤高を守るか、という岐路に立たされた時代であつた。矢部博士のこの間の日記は痛ましく悲しい。

(昭和一三年一月三一日) 最近又第二次の「人民戦線派」検挙の報がある。

(二月一日) 有沢広巳、美濃部亮吉に、脇村義太郎君までやられている。(中略)全国で三八名余に及ぶ。(中略)貴族院では三室戸というのが田中耕太郎さんの「法と宗教と社会生活」の中に神社を冒瀆したところがあるとして非難の演説をしている。暗澹たる世相だ。(二月二日) 昨夜留置場に過ぎた人々のことを痛切に想わざるを得ぬ。

(二月三日) 世相憂鬱で生きるのに興味もなくなる位だ。

(二月四日) 僕は学問と大学をライフ・ワークとして扱んだ以上、

それと生死を共にすることに何らの懸念もないが、妻子の運命を思うと実に辛い。

(二月五日) 三室戸なる男は更に(田中耕太郎氏の——中村註)「教養と文化の基礎」を問題にしている。

(二月六日) 衆議院の予算分科会では江藤源九郎という札付き議員が、更に末弘、蟬山、横田、宮沢の諸教授の著書について攻撃し云々。

(二月七日) 夜机に向う気もなく、ぼんやりしていた。静子に話したら、万一そんなことになつてもどうにかやりますと言つてくれた。

(二月八日) 昨夜憂鬱にとざされて睡眠出来ず、(中略)研究室でいやいや乍ら講義の草稿。

窒息の時代を日毎つづる文字を抜きがきしていたら、際限がない。やがて矢部博士は、右翼学生から、プリント、講義について毎時間質問され、連日手紙で非難され、戦々兢兢となる。「頭の芯が疲れている」「頭が少し痛い」(昭和十三年四月九日)。

狂気だ、ロジックがない、頭が変な奴に相違ない、と日記ではこれら学生を非難しているが、そのような学生の手紙に長時間かけて返事を書き、はじめは採点しないつもりも学生の答案に「優」をつけ、学内で出会えば話しかけ、かれらの攻撃をさげようとする。

昭和一五年二月七日頃には、学生は「矢部さんは変つてしまつ

た。何も期待するところはない」というようになり、二月一三日の講義では大政翼賛、国体という言葉をくり返しいうので学生に変な顔をされる。こういうことをいわねばならぬ「時勢」なのだ、矢部は書き刻んでいる。

初めは処女のごとく戦争におびえていた矢部博士も、やがて戦争Ⅱ歴史の進展中の一人の人物と自負するまでになつていくが、その転換の原因を、おそいかかる右翼や弾圧のせいだけにはできないであろう。嵐に耐えた者が皆無ではなかつたのであるから、時局に便乗した者の個性、責任も問われなくてはならない。そのような配慮が読者に常備されていなくてはならないが、それでもなおかつ時代の潮の目が、右の抽出された断片においても鮮やかであろう。

仮面に怯えていた者か、ひとたび自らその仮面を身につけると、仮面はそれをつけた者を一変させるのであろうか。近衛文麿のブレインとして新体制秩序の立案に参画し、海軍省、外務省、大東亜省の囑託として大東亜共栄圏の理念・政策の指導にあたる。その努力は並のものではなく、矢部博士のエネルギーの、もつとも若々しい部分は日中戦争から敗戦に至るまでのあいだに、おおかた使い果たされたのではないかと思われるほどである。連日連夜、時局に埋没した矢部博士に返つてきたものはなんであつたらうか。日本の破滅が総決算であることは間違いないが、そこまで行く過程において、一齣一齣の展開があるようであり、じつはその一齣一齣が挫折し、破綻しているのである。つまり、消えた一齣と新たに生じた一齣と

の間に連続がなく、それゆえに発展がないということである。

近衛新体制構想にしても、昭和十五年五月二十八日、昭和塾で新政治の方向や国民運動について話をしたのが契機で、後藤隆之助氏が近衛文麿公にも話してくれということからはじまる。五月三〇日、会いに行くのは面倒臭いと書きながら、六月一日会見すると「一つの光明が与えられた」と変化し、尾崎秀実氏を通じて近衛の新党運動をたのまれ（六月二六日）、やがて近衛のブレイクになることに「悉く快諾」（六月二四日）するに至る。七月一日、近衛と会い、その優柔不断に不満を抱きながら七月七、八日、十三日とあい、八月二八日には新体制準備会の声明文を出す。「僕も歴史的な文章を一つ書いたことになる」と自己満足する。しかしながら、声明文は出て新体制は挫折した。「問題は要するに近衛自身の不惜身命の決意に在るのに、近衛自身は陣營を持たず、人のふんどしで相撲を取らうとするところに弱点があり、力のないために」（昭和十六年一月三日）、博士は甚だ心の暗くなる思いであつた、と書きとどめている。千載の恨事（同年二月三日）とすら記す。

昭和十六年秋頃（第三次近衛内閣の末期、末次信正政権を実現しようという情熱を燃やすが、これも意気込みだけで終る。海軍省の仕事で連日忙殺されており、その末にまとめた「大東亜新秩序の政治的構図」の検討会に海軍側が熱意を示さないと「なんだかつく／＼嫌になつて、積極的の海軍のために努力する気も失せて来る感じを如何ともし難い」（昭和十七年一月二四日）こともたびたびである。我を忘れてフルスピードで廻転しているときは、廻転によつて遠心分離さ

れた心の空白に気がつかないが、少しでもスピードが落ちてくると、その深淵に自己懺悔せざるをえないのである。「近来僕の心に蟠る憂鬱の原因が判つて来た。即ち国事と戦争の事に熱中し乍ら依然僕の心中にあるのは静かに真理を探求したいという学究の切願だ。その切願が世事で煩わされることについての憂鬱なることに想倒^じする」(昭和一九年五月一六日)。

矢部博士は、たしかに国事に熱中はした。席のあたたまることのない奮迅の連続であつたが、この刻明な日記に出現する多数の人物は、大学関係、研究会関係の人間を除けば海軍省、外務省、大東亞省の中級事務局クラスの人物であり、それ以上の指導的な人物は近衛文麿を例外とすれば、ほとんどいないといつても過言ではない。

しかも近衛との数度にわたる会見において、近衛をして政治的に決断・実行に奮起させるほどの影響をあたえたわけではない。軍の最高指導部、政界の指導的な人びと、重臣・元老、財界人との接触もほとんどない。要するに、政策決定の中枢部にはタッチしてないのである。政策決定を行う上層部に提出する文書をつくる事務局クラスと毎日、齟齬と接渉してただけであつたということになる。こうして博士は日本を動かす政治の内面には深く立ち入っていないのであるから、この膨大な日記から、重大な政治的新資料を見出すことはできない。政治史上の資料という点からでなく、日中戦争から太平洋戦争敗北に至るまでの間に、一学者が、いかにして軍国主義の嵐に巻き込まれていったかという過程を知る上では見逃すことのできない資料になるであろう。さらにまた、矢部博士個人の精神の展

開過程だけではなく、その周辺に蟠集する戦中戦後の著名知識人の生態・精神状況を究明する上でもまた貴重な文献になるであろう。

(一九七四年、讀賣新聞社刊)

中村勝範